

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 7 年度病虫害発生予報第 1 号 (4 月) について

このことについて、病虫害発生予報第 1 号を発表したので送付します。

予報第 1 号

4 月における主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	現 況 (発生量)	4 月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	やや少 やや少 やや少	やや少 やや少 やや少	やや少 やや少 やや少
なし	黒星病	—	並	並
	赤星病	小生子の飛散は平年より遅く、前年よりやや遅い 冬胞子堆の発芽最多期は 4 月 3 日以降		
イチゴ	灰色かび病 うどんこ病 ハダニ類	並 やや少 やや少	並 やや少 やや少	やや少 並 やや多
冬春トマト	灰色かび病 コナジラミ類	やや少 ³⁾ 並 ³⁾	— ³⁾ — ³⁾	やや少 並
冬春ナス	灰色かび病 すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	やや少 並 並	やや少 並 並	並 少 並

注 1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去 10 年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。

注 2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病虫害の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（—）、やや少発生（—～±）、並発生（±）、やや多発生（±～+）、多発生（+）として示し、+-を総合的に判断して発生量を予想しています。

注 3) 冬春トマトについては令和 4 年度からの調査で平年値が無いため、現況（発生量）の欄には前年比で記載しています。

<予想される向こう1か月の天候（令和7年3月29日～令和7年4月28日）>

1週目は寒気の影響で気温が低くなりますが、2週目は暖かい空気に覆われやすいため気温が高くなる見込みで、期間の前半は気温の変動が大きいでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低30 並30 高40% ほぼ平年並の見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み	少30 並40 多30% ほぼ平年並の見込み

（福岡管区気象台 令和7年3月27日発表1か月予報より抜粋）

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

なお、3月より当ホームページアドレスを下記のとおり変更しました。旧ホームページは4月1日より利用ができなくなります。旧ホームページをお気に入りやブックマーク等に登録されている場合は、お手数おかけしますが設定の変更をお願いいたします。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL:<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-bouzyosyo.html>

または右QRコード①

①⇒



○X（旧 Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせをしています。

X（旧 Twitter）の本アカウント（福岡県農作物病虫害情報）へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右 QR コード②

②⇒



【果樹：かんきつ】

1 そうか病

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

（2）予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病葉率 0.04%（平年 0.16%、前年 0.21%）

発病ほ場率 12.5%（平年 13.5%、前年 25.0%）

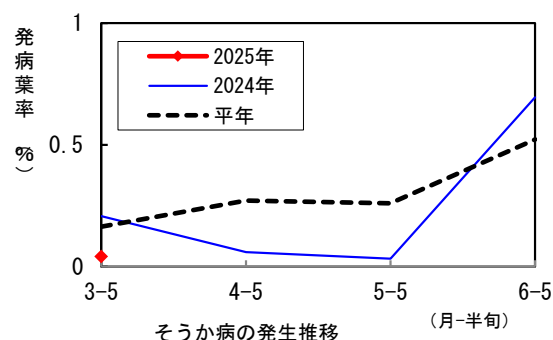
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発芽直後～展葉期の薬剤防除を徹底し、初期発病を抑える。

イ 罹病葉は伝染源になるので除去する。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、最終ページの内容を確認の上、適切に実施する（以下の病虫害についても同様）。



2 かいよう病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病葉率 0.1%（平年 0.3%、前年 0.4%）

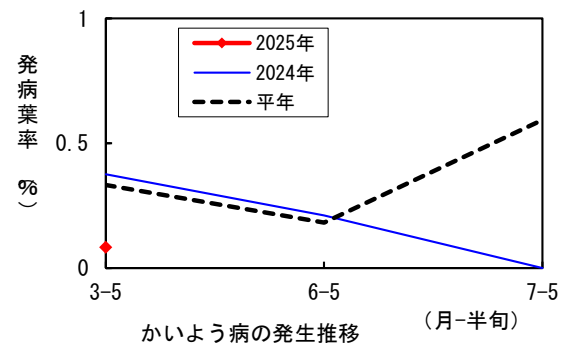
発病ほ場率 25.0%（平年 20.5%、前年 50.0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除は、発芽前・開花前の雨前に予防的に実施することが重要である。

イ 発病枝や発病葉を除去し、焼却等適正に処分する。



3 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生葉率 0.5 %（平年 4.1%、前年 3.0%）

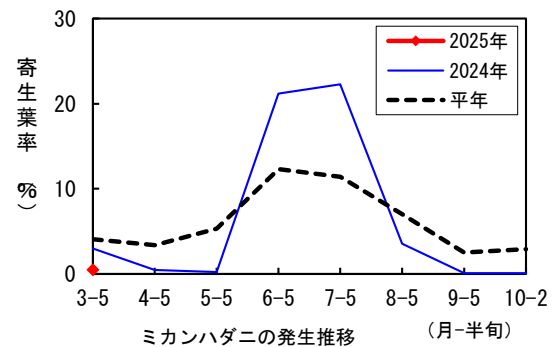
発生ほ場率 25.0 %（平年 35.5%、前年 37.5%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

イ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布する。



【果樹：なし】

1 ナシ黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 2024年8月2半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率:1.8%（平年3.6%、前年21.1%）、発病葉発生ほ場率:83.3%（平年63.9%、前年88.9%）

発病果率:0.1%（平年3.4%、前年 1.6%）、発病果発生ほ場率:41.7%（平年51.8%、前年55.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 芽基部病斑等の発生状況には十分注意する。

イ 薬剤防除は、開花直前から満開20日頃までが最も重要な時期である。

ウ 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

エ 薬剤防除あたっては、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため異なる系統の薬剤をローテーション散布する。特にDMI剤やQoI剤、AP剤、SDHI剤を用いる場合は、同一系統剤の使用回数は春季防除で年1回、年間でも2回以内にとどめる。

2 ナシ赤星病

(1) 予報の内容

小生子の飛散は平年より遅く、前年よりやや遅い。冬胞子堆の発芽最多期は4月3日以降と予想される。

(2) 予報の根拠

ア 中間宿主であるビャクシンの定点調査（筑紫野市）の結果は下記のとおり

ビャクシン上のナシ赤星病冬胞子堆の成熟状況の推移(水浸法)													
調査地点	調査時期 月-半旬	2020年		2021年		2022年		2023年		2024年		2025年	
		膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度	膨潤率(%)	成熟度
筑紫野市	3-5	57	24	80	49	5	1	44	18	75	52	53	30
	4-2	93	53	100	92	64	27	100	69	100	93		
	4-5	100	87	100	90	100	92	-	-	100	100		

イ 「冬胞子堆発芽最多期予想の回帰式（福岡県立園芸試験場、昭和45年）」により、ビャクシンからの小生子の飛散ピークは4月3日（平年予想日：3月29日 前年予想日：4月1日）以降の降雨後と予想される（計算式省略）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ナシ園周辺のビャクシン上の冬胞子堆の状況把握に努め、週間天気予報で降雨日を把握しながら、適期防除に努める。

イ 薬剤防除に DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP（アピバリジン）剤を用いる場合は、薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、異なる系統の薬剤をローテーション散布し、同一系統剤の使用回数は春季防除で年1回、年間でも2回以内にとどめる。これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。

【野菜：イチゴ】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病果率 0.10%（平年 0.11%、前年 0.09%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

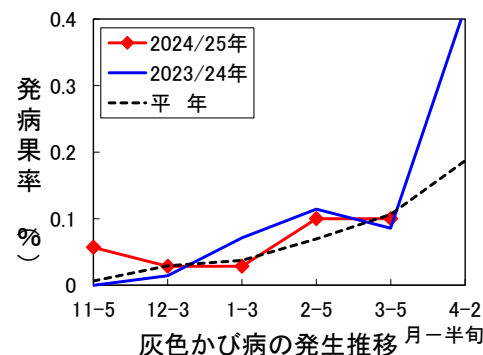
イ 収穫後の花梗枝は、放置すると感染源となりやすいため、早めに取り除く。

ウ 適切にハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かぎ後に防除を行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

オ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病株率 0%（平年 0.37%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

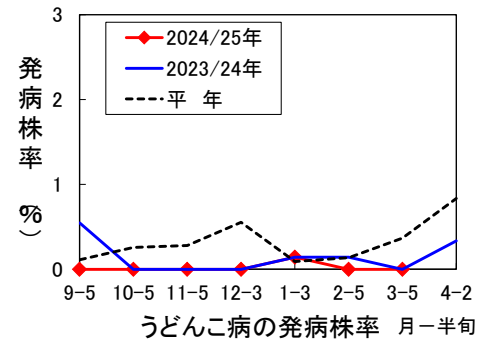
イ 収穫後の花梗枝は、放置すると感染源となりやすいため、早めに取り除く。

ウ 適切にハウス内の換気を行い、湿度の低下を図る。

エ 不要な下葉は早めに除去する。下葉かき後に防除を行うと効果的であり、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

オ 病勢が進展すると防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

寄生株率 7.0%（平年 14.1%、前年 2.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるため、除草を徹底する。除草した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れて密封し処分する。

イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。

ウ 薬剤感受性が低下しやすいので、気門封鎖剤も利用し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

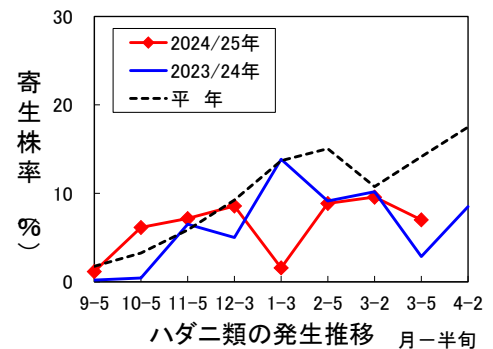
エ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するように丁寧な散布を心がける。防除は摘葉後に行うと効果的である。

オ ミツバチや天敵に影響が少ない薬剤を使用する。

カ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。

<県ホームページ掲載の「令和7年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「イチゴのIPMマニュアル」参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/749464_62334252_misc.pdf



【野菜：冬春トマト】

※ 2022年から調査開始のため、平年値無し。

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

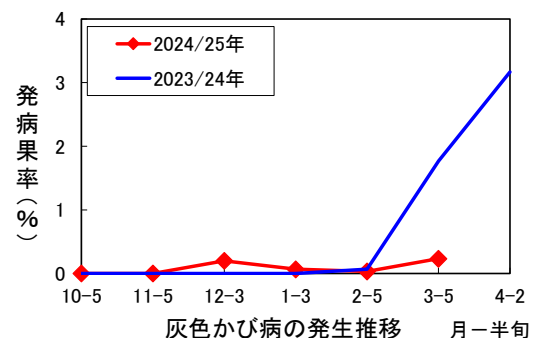
発生量：前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 3月5半旬調査の結果、発生量は前年よりやや少なかった（－～±）。

発病果率 0.2%（前年 1.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病葉は速やかに除去する。
- イ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。
- ウ 予防散布に努める。
- エ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

2 コナジラミ類

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

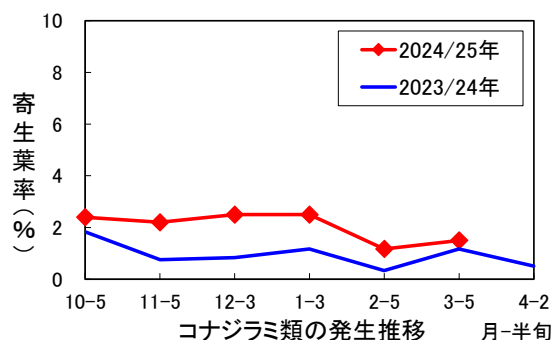
- ア 3月5半旬調査の結果、発生量は前年並であった（±）。

寄生葉率 1.5%（前年 1.2%）

- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。
- ウ 多発後は防除が困難であるため、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。また、定期的な薬剤防除を実施する。
- エ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：冬春ナス】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

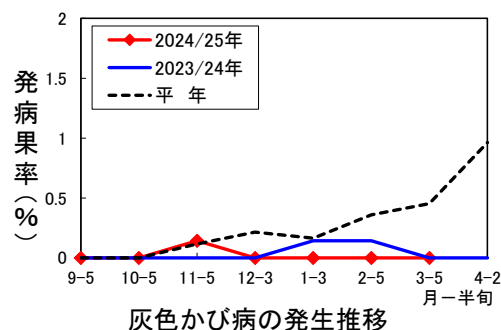
- ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

発病果率 0%（平年 0.5%、前年 0%）

- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病果、発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。
- ウ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。
- エ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。
- オ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 すすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

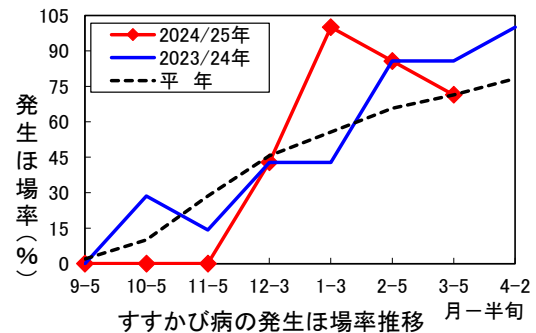
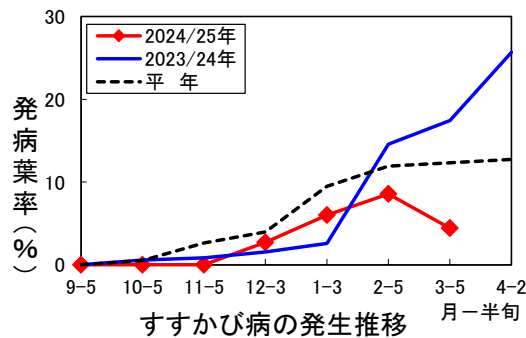
(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病葉率 4.4%（平年 12.3%、前年 17.4%）

発生ほ場率 71.4%（平年 71.4%、前年 85.7%）

- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病葉は見つけ次第速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- イ 樹勢が低下すると発病が助長されるため、樹勢が低下しないよう肥培管理に努める。
- ウ 不要な枝葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。
- エ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。
- オ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。
- カ 同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

3 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 3月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

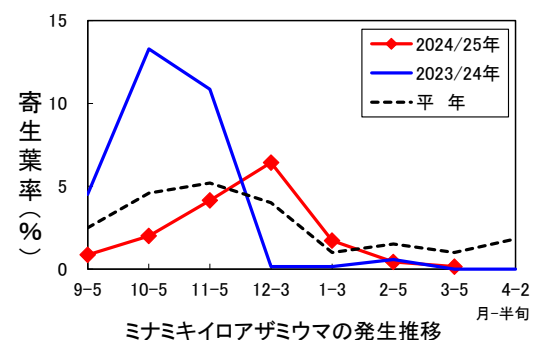
寄生率 0.1% (平年 1.0%、前年 0%)

- イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内や周辺の雑草は増殖の場となるため、除草を徹底する。
 - イ 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。
 - ウ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。また、定期的な薬剤散布を実施する。
 - エ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布する。なお、薬剤抵抗性の発達を回避するために、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
 - オ 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響が大きい薬剤は使用しない。
 - カ 化学薬剤だけでは防除が困難であるため、天敵等を利用した総合的防除を積極的に実施する。
- <県ホームページ掲載の「令和7年度版病害虫・雑草防除の手引き」-「IPMの推進」-「冬春ナス IPM マニュアル」参照>

https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/749464_62334258_misc.pdf



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布は場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。